

# 呉派初期の別業図——沈周「東莊図」冊を中心に

宮崎 法子

はじめに

近世中国の知識人は、科挙に及第し政治を担うことを志したが、その一方、胸中には隠逸への憧憬を抱いていたといわれる。少なくとも、そのような思いを抱くことが、知識人＝文人としてふさわしい境地とみなされていた。宋代以降、飛躍的に発展した山水画も、基本的には隠逸の理想郷の表象であつたし、文人たちが自ら絵筆をとって描いた文人山水画には、山中に隠棲し、閑居する自身の姿が描かれた。その嚆矢は、文人画の祖とされる唐の王維の「輞川山荘図」巻（現存するものは後世の模本や石刻の拓本）であり、同じく唐の盧鴻の「草堂十志図」巻や、北宋の李公麟の「龍眠山荘図」巻の模本が伝わっている。

そして、文人山水画が大きく発展した元代以降、それは文人画の主要な画題となったのである。元代の江南では、多くの知識人が仕官の道を閉ざされた。彼らにとって隠棲は憧憬するものではなく、いわば余儀なくされた現実であつた。釣り人や漁師に隠逸の思想を仮託した漁隱図<sup>1</sup>や、自身や友人の隠居の姿を描く「山居図」や「書斎図」が、元代文人画の中心的なテーマとなったことは、いわば必然であつた。

そのような元の江南文人画は、元末の戦乱と明初の苛烈な政策を経

て、明代半ばに至ってやつと経済的復興を遂げた蘇州において、継承されることになる。十六世紀の蘇州画壇では、閑静な草堂で客をもてなす様子を、主に短い画卷形式に描く「別号図」が盛行した。それは明代の蘇州画壇を特徴づける画題となり、呉派文人画の盛衰と同期するように消長した<sup>2</sup>。

別号とは、文人が用いた別称であり、ほとんどが、その人の書斎の名称や、別荘（当時、別業、別墅と呼ばれた）やそこに建てられた庵や草堂の名称が用いられた。別荘は、引退した官僚や、地主や富裕な商人などが、文人的な境地や、高雅な趣味を表わす場であり、それを描いた別号図は、何よりもよくその人となりを表した、人格と精神を表す「肖像画」のような役割を担ったのである。

そして、明代の蘇州における隠棲の場は、かつてのような山中の草堂ではなく、蘇州をはじめとする江南都市の城内や近郊に美しく整備された別荘（別業、別墅）や園林であつた。園林は、明代蘇州文化の精華であり、多くの文人や富裕層がそこに情熱と財力を傾けることになった。今日も、蘇州には数多くの庭園が残っている。それは後の改修や興廃を経て、当初の面影は失われているものの、明代蘇州の繁栄と富が傾注された、当時の人々の熱狂と夢の名残といえる。

さて、明代中期の蘇州で盛行した一般的な「別号図」は、広大な別業や園林の景観を具さに描写するものではなく、簡素な草堂で童僕に茶を用意させ客人を迎え、古銅器や書画を鑑賞するなどの、別業での主人の高雅な様子を描いた図であった。従って、園林は、草堂周辺の奇石や竹林、梅林など、一部が示されるに止まっている。なかには、別号図の流行と広がり、結果、唐寅「桐山図」巻（北京故宮）のように、崖とそこに生える桐の木のみを描いて「桐山」という号の絵解きを示すなど、書斎や別業とは無関係のものも存在したが、十六世紀蘇州の別号図の典型は、別業の草堂での閑居を描くものであった。

そのような別号図巻の盛行に先行し、広大な別荘の情景を、景観ごとに題を付し、より具体的に伝える画冊形式の「別墅図」や「別業図」も、十五世紀半ばの蘇州で描かれていた。

その代表が、ここに取り上げる沈周の「東莊図」冊二十一幅（南京博物院）（図1、8、9、10）であり、さらに、沈周の画の師杜瓊が描いた「南村別墅図」冊十幅（上海博物館）であった（図2）。それらは、いずれも、親しい人物のために、画家もよく見知っている別業の景を描いたものであった。後の文徵明にも同様の画冊形式の「拙政園図」冊（メトロポリタン美術館）があるが（図3）、それは引退した官僚王猷臣からの依頼による作品であり、杜瓊や沈周の画冊に見られるような真実味が乏しく、親しい友人に贈った他の文徵明画とも画風に開きがある。作品の真偽について今は問わないとして、その画風の差は、画家にとつての制作動機の違いや、別業の主人と画家との関係性の違いなどにも由来すると感じられる。<sup>3</sup>

一方、杜瓊と沈周の作品は、呉派初期の画冊形式の別業図として重要であり、いずれも作者と非常に親しい人物のために自発的に描かれ、画

家の代表作に挙げられている。特に「東莊図」冊は、沈周の画風展開上、大きな画期となる作品といえることができる。

本稿では、杜瓊「南村別墅図」冊と沈周「東莊図」冊の概要と制作背景を示し、さらに「東莊図」冊の制作期に関して考察する。その上で、今後稿を改めて「東莊図」を中心に沈周の初期から中期の画風の展開について論じ、呉派の別業図における本作品の位置づけを行いたいと考えている。

## 一 杜瓊「南村別墅図」冊

「南村別墅図」は、元末明初の文人陶宗儀の別墅「南村」の十の景を描く。杜瓊は少年期に陶宗儀のもとで学んだ。杜瓊の自跋によれば、陶宗儀の急逝後、数年して、偶然、南村の十景を詠んだ陶宗儀の詩を見つけた。それを見て思い出がこみ上げ、詩に沿って記憶している景を十幅の画にした。ある日、陶宗儀の子で、友人でもあった陶紀南が杜瓊を訪ねてきたので、その絵を取り出して示し、ともに往事を懐かしんだ。紀南の求めに応じて陶宗儀の題詠十詩を画の後ろに書した上で自跋を記し贈った。時に正統八年（一四四三）、杜瓊は四十七歳であった。<sup>4</sup>

作品は、穏やかな筆法で、各景を異なる構図、視点によって捉えている。「朱青軒図」（図2-3）や「閩楊樓図」（図2-4）、「漁隱図」（図2-9）のように遠く広やかな眺望を描くものや、「竹生居」（図2-1）や「蓼華庵」（図2-7）のように、庵を中心とその周辺の景を捉えたものなど、変化に富む。後者の図様は、二十年以上後に描かれた「友松図」巻（北京故宮）（図4）の構図に近く、後の定型化した別号図巻の図様にも通じている。<sup>5</sup>

このような草堂を中心として隠棲の場を描く画卷の図様は、すでに元の文人画にも見られるもので、杜瓊もそれらに基づいていると考えられる。同様に、画冊形式の別業図の先例として、明初の徐賁が師の林如海のために描いた「獅子林図」冊（全十二景）（台北故宮）（図6）を挙げることができる。徐賁は蘇州の人であり、獅子林は、元代に蘇州東城に開かれた禪寺の庭で、奇石で知られ、現在も名高い名園である。同郷の杜瓊が徐賁の作品を見て、そこから影響を受けた可能性も考えられる。

「南村別墅図」には、元風の篆書の題が画中に記されており、図様のにも「獅子林図」と共通するところが見受けられる。この「獅子林図」冊は、呉派の園林図の成立に係わる重要な作品として、今後さらなる検討が必要であろう。だが、杜瓊の作品には、やはり、元風の書斎図巻、例えば王蒙「惠麓小隱図」巻（図5）やこの徐賁の「獅子林図」とは、異なる新しさがある。すなわち、それらが景物に近接した視点から描かれるのに対して、「友松図」巻（図4）や「南村別墅図」冊（図2）はより距離をとり余白が広く、景物も整理されている。加えて、淡く美しい彩色によって、明るく親しみやすく、穏やかな印象を与える。それは、後の呉派山水画に通じる特徴で、杜瓊画は、その先駆的な作例としても注目されるのである。

「南村別墅図」冊の自跋から、作画の時期を限定することは難しい。今日伝わる他の杜瓊画はほとんど、五十歳以降の作品だが、四十七歳以前のこの作品が、それらと比較して、遜色のあるようには見えない。文人画の場合、二十代、三十代の作が伝わることは希であり、杜瓊の画技が早年から高かったということも聞かない。それどころか、杜瓊の画力は晩年でさえ、あまり高い評価を得ていない。制作年を限定するには、杜瓊画全体についてのさらなる検討が必要であるが、それは本論の論点

ではないため、ここでは、ひとまず、四十七歳の自跋執筆時から、それほど遡らない時期の作という推論を示すに止めたい。

さて、この画冊には、蘇州の文人で杜瓊の友人、沈周とも親しかった周鼎の篆書の題がある。また、成化辛丑（一四八二）年の呉寛の跋もあって、それによれば、紀南がこれを呉寛のもとへ持参し跋を求めたことが分かる（呉寛の文集には未録）。その頃、呉寛は北京にいたので、紀南が北京へ赴いたのであろうか。事情は目下不詳である。さらに董其昌の跋があり「沈周の父恒吉は杜瓊に画を学び、沈周の画は恒吉より伝わった。杜瓊は陶宗儀に接していた。これが、呉門画派の源流である。」<sup>7</sup>と、呉門画派の系譜におけるこの作品の重要性を語る。

いずれにせよ、それら現存の題跋から、この作品は、杜瓊から紀南へ一四四三年に贈られてから、少なくとも呉寛の跋の頃（一四八一年）まで、ずっと紀南の所有であったことは間違いない。紀南は杜瓊の友人であり、杜瓊も、題を書いた周鼎も、跋を書いた呉寛も、みな沈周と直接交流がある。杜瓊を画の師と仰ぐ沈周が、この作品を直接目にしていた可能性は高い。後に述べるように、「東荘図」冊には、この作品からの影響を窺うことが出来る。

ちなみに、陶宗儀の南村を描いたのは、杜瓊だけでなかった。陶宗儀の生存中、陶宗儀の従兄弟にあたる王蒙も「南村真逸図」や「南村草堂図」（いずれも失伝）（『汪氏珊瑚網』巻35、『清河書画舫』巻11、『書画題跋記』巻9等に著録）を描いていた。王蒙は、沈周の祖父沈澄とも親しかった。この作品は、このように、元以来続いてきた江南文人たちの絵画を介した交流のなかから生まれ、賞玩されたのである。

陶宗儀の南村は、『松江府志』には「南村草堂、泗涇の北に在り。陶宗儀の耕読の所」というのみで具体的な記述はない。杜瓊の「南村別墅

「図」は、この文字資料をはるかに凌駕し、その規模や景観を伝えている。南村別墅のスケールは、草堂とは名ばかりで、少なくとも四つの建物と一つの東屋のある、相当な規模をもつ別業であったことが分かる。唐の王維の「輞川山莊図」も、現存の石刻や模本から見て、驚くほど大規模な別業であった。中国文人の「草堂」は、今日の私たちの想像を越えるスケールを有していたのである。

各幅が異なる発想によって描かれ、変化に富むこの作品は、画冊という形式がよく生かされている。このように、画冊形式に園林や別業などの実景を一景ずつ描くことは、徐賁の「獅子林図」冊にすでに見られた。さらにそれに先行して、南宋の宮廷画家や民間の画家が描いた「瀟湘八景」や「西湖十景」などの、定型化した「八景図」や「十景図」が描かれていたが、徐賁画や杜瓊画は、身近に知っている園林や別業を描き、文人の実景図としたことが新しい展開である。また、杜瓊の「南村別墅図」では、最終幅を雪景で終わらせていることが注目される。それは、陶宗儀の十景詩に即してのことであるが、「瀟湘八景」や「西湖十景」、また「獅子林図」にも雪景が含まれているにもかかわらず、それらは、最後に置かれていない。杜瓊の「南村別墅図」は、結果として、後に山水画冊の最終幅に雪景が多く使われるようになることにつながる作例としても注目される。

なお、このような画冊の形式は、別業ばかりでなく、画家が訪れた名蹟を描く実景図や、より長い旅の様々な場面を記録する紀遊図などにあふさわしい形式である。「紀遊図」の先例としては、すでに明初の王履の「華山図」冊（上海博物館）があつたが、それは遠方の奇観の記録であり、杜瓊の「南村別墅図」は身近な景を画冊に描いている点で、後の呉派の画冊形式の実景図や紀遊図の先駆的な作品と位置づけることが出

来る。また、画冊形式は、幅ごとに一画家の法で描く倣古図の、特に習画期の連作に非常に好都合でもあつた。次に述べる沈周も、初学期の作品に倣古山水冊が多く見られる。

## 二 「東莊図」冊

### 二―一 現状

さて、杜瓊の「南村別墅図」から数十年後、沈周も画冊形式の別業図、「東莊図」を描いた。それは、友人呉寛（一四三五―一五〇四）の父、呉融が蘇州の東城荊門内の旧宅の跡に営んだ別業を描いた作品である。

「東莊図」は、天地二三・八cm、横六六cmの見開き一紙の左半分に図があり、右半分にその景の名称を篆書で大書する。中央の折れ線から、左の絵の彩色が右へはみ出しているところが何カ所か認められる（図11c、11dの各右端の部分）。一紙の左右に画と書を配することを当初から企画した大作である。標題の筆者は、第一幅の「東城」に「貞伯」白文印が、最終幅の「知楽亭」に「李姓私印」白文方印、「應禎」朱文印があり（図71a・b）、同時代の蘇州の文人李応禎と分かる。沈周の落款や印章は現作品上には残っていない。

清の王文治の書した引首「石田先生東莊図」があり、後跋として、董其昌の丁巳（一六一七）と辛酉（一六二一）の二跋二開と、清人の諸跋が続く。

董其昌の第一跋には、沈周が呉寛のために描いたもので、李応禎の篆書と双璧をなすこと。王百谷（伝未詳）から、湖州長興の姚一元<sup>10</sup>の所蔵と聞いて依頼したが、その際には見ることがかなわず、京口（鎮江）の



張修羽に帰して、やっと見ることが出来たと述べる。第二跋には、文嘉の旧蔵品であったことや、姚一元の手を離れてから、張修羽がやっと入手した時には、もと二十四幅あったものが二十一幅になってしまい、沈周の長文の跋も失われたと記し、「この作品の世界に遊べば、百城治めることなど何ら羨むことでない」と絶賛する。<sup>11</sup>この跋文が、落款も印もない本作品を、沈周画に疑いないものと担保して来た。ちなみに、第一跋の書かれた一六一七年の前年に、董其昌の屋敷が焼き討にあう所謂「民抄董宦事件」が起き、数カ月間故郷に戻れなかった董其昌は、友人のもとを転転としていた。その頃の跋である。

## 二二 「東莊図」 冊の伝来

董跋からは、文徵明の次子文嘉（一五〇三—一八三）の旧蔵品で、のち湖州の姚一元（一五〇九—一七八）から京口（江蘇・鎮江）の張修羽の所蔵に帰したことが分かる。その後は、画冊上に残る鑑蔵印（「張則之」朱文方印など）から、同じく鎮江の收藏家張孝思（字則之、張修羽の一族か）の所有に帰し、その後、清の呉栄光（一七七三—一八四三、嘉慶一七九九の進士）の所蔵（「呉氏伯榮」朱文方印など）を経たことが分かる。清末には龐元濟（一八六四—一九四七）の所蔵となり『虛齋名畫錄』（卷11）に著録されている。

この作品についての明代の著録はないが、隆慶『長洲県志』（卷12）（隆慶五年「一五七二」刻本『天一閣藏明代方志選刊統集』所収）の「東莊」の條では「凡そ二十二景有り」といい、割り注に「李学士東陽記、沈山人周図」と記している。呉寛自身が編纂に係わった正徳元年（一五〇六）の『姑蘇志』「東莊」の條には「十景」と増築された二亭の名を挙げるのみで、割り注に李東陽「東莊記」や沈周等の詩を採録して

いたが、沈周の図画への言及はなかった。後の隆慶『長洲県志』のこの記述は、二十二景という景の数から、現存の「東莊図」冊との関連を強く示唆している。そうであれば、董其昌跋にいう、もと二十四幅あったというのは、沈周の長文の跋二幅と画幅二十二幅から成るもので、失われた画幅は一幅のみという可能性も考えられよう。

## 二三 呉融の東莊をめぐる人々—正徳『姑蘇志』から

東莊は、呉寛の父融（字、孟融）が、呉家の旧宅の跡に営んだ別業であった。その地は蘇州城の東南、現在の蘇州大学の辺りに位置し、絹織物生産の中心地域であった。呉寛の父も絹織物業を営んで財を成し、商業の中心である蘇州城内の西部に移居したが、晩年に旧宅を別業として整備し、自ら「東莊翁」と号した。<sup>13</sup>

正徳『姑蘇志』は、弘治年間に呉寛が手がけ、その遺稿を王鏊が引き継いで刊行されたものだが、その巻32の「園池」の最後に「東莊」が載る。「東莊は呉文定公（呉寛）の父、孟融が治めた。なかに十景がある。孟融の孫奕（呉寛の弟呉宣の子）が、さらに看雲・臨渚の二亭を増建した」という。<sup>15</sup>そして、割注の形で、李東陽「東莊記」と沈周らの詩が採録される。記を書いた李東陽は、湖南茶山の人で天順八年（一四六四）に十八歳で進士に及第し、呉寛の官界での友人となる。『姑蘇志』所収の「東莊記」の年紀は「成化己未七月」とあるが成化年間に己未はなく、内容からも「成化乙未」（一四七五年）の誤りであろう。<sup>16</sup>

呉寛は成化壬辰（一四七二）に、状元及第を果たす。そのため父の融も官位を賜われることになった。「東莊記」はそれを祝して李東陽が、呉寛の依頼によって記したものである。李東陽は当時若くしてすでに官界にあった。その行歴を見ると、東莊を訪れたことはなかったと考<sup>17</sup>

られるため、「東莊記」の前半の東莊の景の描写は呉寛からの情報によるはずである。「東莊に諸賢の詩が寄せられたことで東莊の名がさらに高まった」と述べ、呉融の徳を称え、その封官を祝す内容となっている。

続いて、東莊の豊かな生産力を讃える劉大夏の詩と、東莊が城内にありながら隠逸の別天地であることや、呉融への封官の詔が昨日下ったことを述べる李士実の詩が採録される。劉大夏も李士実も都の高官で李東陽と親しい人物であった。<sup>18</sup> いずれの詩も都で書かれたもので、実際に東莊に赴いての作ではない。これらの詩文は、呉寛の状元及第とそれに続く都での華々しい交友を示し、父である東莊主人呉融の榮譽の証でもある。それに続く沈周の詩は、東莊の実りで近隣の飢饉を救った呉融を称え、子の呉寛が高官となつて、呉融が恩封を賜り、近々朝服を着る身分になったことを祝す。この詩は、「東莊為呉匏庵尊翁賦」という題で『石田先生集』に見え、成化十年（一四七四）に、東莊に呉融を訪れて贈った詩とされる。<sup>19</sup>

## 二一四 呉寛の服喪と帰郷

だが、成化十一年（一四七五）、李東陽の「東莊記」の一カ月後の一四七五年八月に、呉融は亡くなる。呉寛は帰郷し、三年の喪に服す。その間、翌一四七六年八月には呉寛の兄、宗も亡くなった。<sup>20</sup>

沈周は、その年の秋に東莊を再訪し、呉融への挽詩を贈った。<sup>21</sup> 翌年（一四七七）には沈周の父恒吉も亡くなり、さらに翌年（一四七八）の一月三日に沈周は父を蘇州の西に埋葬した。呉寛ら友人が沈周を途中の大石山まで送った。<sup>22</sup> 一月二十六日に、呉寛は沈周を自宅に（東莊ではなく蘇州西の城内の邸宅であろう）招き、沈周は「雨夜止宿図」（失伝）

を描いた。<sup>23</sup> 二月には呉寛が相城の沈周宅を訪れ、虞山に遊び、また沈家所蔵の古銅器や書画などを鑑賞し題詩を書いた。<sup>24</sup> 三月十日、呉寛は喪が明けて北京へ旅立った。<sup>25</sup> このように呉寛の帰郷中、沈周と呉寛は時に李応禎も交え親しく交流している。<sup>26</sup> その後、呉寛は中央で官職にあり、蘇州に帰ったのは、継母王氏の服喪のため一四九四年からの三年間のみであった。<sup>27</sup>

## 二一五 東莊を継ぐ者

さて、呉融亡き後、東莊の運営管理を引き継いだのは呉寛の弟呉宣であった。その宣（号拙修）も一四八五年に亡くなり、その子の呉奕（呉寛の甥）が、父に代わつて東莊の管理を引き継ぐことになる。『姑蘇志』所引の呉寛の詩は、甥の呉奕から、呉寛の引退後のために二亭を増築したことを知らされ、それに応えた詩で、『家藏集』巻28に「奕姪構二亭于東莊、一在振衣岡、名看雲。一在曲池旁、名臨渚。以書來報待余歸休与諸老同游。喜而寄此」（甥の奕が東莊に二亭を構え、一は振衣岡に在って看雲と名づけ一は曲池の旁に在って臨渚と名づけたことを手紙で知らせて来た。私が退休して友人たちとそこに遊ぶのを待つという。喜んで返事を送った）と題されている。『姑蘇志』の最後の詩は、その呉寛の詩に次韻した（同じ韻を用いた）沈周の詩だが、その時呉寛は都におり、直接会つての詩のやりとりではなく、呉奕のもとに送られた呉寛の詩を見ての次韻詩であろう。そこからも、沈周と蘇州の呉家の人々との親しい交流が伝わる。

なお、その後呉寛亡きあとの東莊については、文徵明が後年、東莊を訪れた際の詩二篇が残っている。その頃はまだ呉家の所有で、呉奕が管理していたと思われるが、すでに呉融や呉寛在りし日の栄光は遠く去つ

た、寂れた気配が伝わってくる。やがて明末の王世貞（一五二六—一五九〇）の頃には、呉家を離れ荒廃した後、すでに別人の園林へと姿を変えていた。<sup>28</sup>

### 三 東莊図冊の制作時期

#### 三―制作時期をめぐって

以上が、東莊にまつわる出来事である。これらをふまえて、沈周「東莊図」冊の制作時期について考えることにする。

沈周には、現存本とは別の「東莊図」冊があったことが、『清河書画舫』などから分かる。<sup>29</sup>それも文嘉の旧蔵で、幅毎に一名家に倣う十三景からなるもので、明末には王世貞の所蔵であった。それは、沈周の自題から呉寛の父、融に贈られたことが分かっている。呉融が東莊を整備し終えたのは晩年であった。<sup>31</sup>そして、呉融は、封官された後、すぐに亡くなった。従って、この十三景冊は、呉融が恩封され沈周が祝詩を贈った（一四七四年）<sup>32</sup>（沈周四十八歳）頃か、それ以前に制作されたものと考えることが出来るよう。一幅ごとに一名家に倣うという形式は、沈周の初期の作品に多く見られるものである。

では、現存の「東莊図」冊は、いつ描かれたのだろうか。沈周画のなかでもこの作品は群を抜いており、誰もが沈周画を代表する傑作と認めているが、他の作品にはない個性や特徴も顕著である。沈周画は、早期の繊細な小品から、四十代に大胆な画法で大幅を描くようになったといわれている。特に、たゆまず古画を学んでいた三十代から四十代、そして五十代にかけての画風の変化や、画風の幅は大きい。また偽作や贋作も多いため、作品の評価も分かれ、その時期の作品を位置づけ、様式的

な展開を追うことには困難がともなう。そんななか、この優れた作品の制作年を確定する作業は意義あるものといえよう。

まず、この作品は、董其昌が二絶と絶賛するように、紙幅の右に李応禎（一四三一—一九三）が篆書で景の名称を記した二十幅以上にわたる大作である。それは、気軽な贈答品ではありえず、友人同士であった沈周と李応禎が揃って準備し、特別な機会に贈られたものと推測できる。後に述べるように、李応禎も官職にあり、故郷蘇州にいた時期は限られていた。

#### 三―二 東莊図冊のなかの二つの「肖像」

そんななかで、この作品の制作年を解く鍵は、「続古堂」図の正面に掲げられた官服を着た肖像画にある（図8-1・2）。大きく描かれた半身像は、柔和な顔つきに個性があり、画冊中でもこの図を最も印象的なものとしている。赤い官服に身を包んだ人物は、この東莊の主であり、亡くなる直前に官位を賜った呉融と考えられる。呉寛の先祖には他に官僚になった者は知られていない。呉寛は、父呉融の肖像画を、成化十三年（一四七七）十二月に、東莊の続古堂に奉納し祝文を奉っている。<sup>33</sup>

そして、「東莊図」冊には、もう一図、非常に個性的な人物が描かれている。それは、「拙修庵」中の人物であり（図9-1・2）、長い髭を蓄える個性的な面貌に描かれている。それは、例えば「息耕軒」（図10-1・2）や「知楽亭」（図1-1b）中の簡略な目鼻の一般的な点景人物とは全く異なり、大ぶりで、強い個性と存在感を持っている。そもそも「拙修」は、呉融の没後、東莊の経営を受け継いだ呉寛の弟宣の号であった。宣は、東莊中の「西庵」に「拙修」という扁額を掲げ、自らの号としたのである。<sup>34</sup>従って、ここに描かれた人物は、拙修その人、つま



り呉宣である可能性も考えられる。そうであれば、この画冊には、すでに故人となり続古堂に肖像が掲げられた「東莊翁」呉融の姿と、その別業を実際に引き継いだ呉宣（拙修）の姿が、文字通り肖像として埋め込まれていることになる。後の「別号図」が、別莊を描くことで主人である人物像を象徴するのと同様のことが、より直截的に表現されていると見ることができる。

だが、そのことは、この拙修庵中の人物が、その実質的な所有者である呉寛の姿であるとしても、結局は同じ構造をもつ。弟の宣、号拙修が呉寛に代わって経営することを、弟の庵である拙修庵のなかに呉寛の姿を描くことで表したとも解釈できるからである。

目下、この肖像主をいずれかに特定することは困難だが、きわめて強い印象を与える人物描写からは、沈周が、友人の個性的容貌を捉えて描写しようとしていたことが窺える。文人画家によるこのような人物表現は稀であり、沈周のこの作品への強い思い入れとともに、呉寛一族へ寄せる暖かく親密な心情によって、独自の描写が生み出されたことが伝わる。

さて、東莊を引き継いだ呉宣であるが、その後ほどなく、一四八五年に早世してしまう。そして、東莊は呉宣の子である若い突に経営が引き継がれた。呉突はその役目をよく果たし、さらに呉寛の退休後に備え二亭を増建した。<sup>35</sup>その時の呉寛の詩と沈周の次韻詩が、先述のように『姑蘇志』の「東莊」の最後に採録されている。そこには、東莊と呉家に訪れた危機が若い呉突によって乗り越えられ、さらに発展したことの安堵と喜びが表われている。

以上が、この作品の制作背景である。そこから、制作期の上限は、呉融の肖像の続古堂への奉納の一四七七年であることがまず確認できた。

### 三―三 篆書作者 李応禎

さらに、篆書の対題を書いた李応禎の動向を見ると、この作品の制作時期はさらに限定される。李応禎（一四三一―一九三）は、景泰四年（一四五三）に南京の郷試に合格し挙人となり、中書舎人となった。成化十四年（一四七八）南京兵部式選司員外郎となるが、すぐに継母の服喪のために蘇州に帰り、<sup>36</sup>成化十八年（一四八二）春、喪が明け帰官した。沈周が送別の詩を詠んでいる。<sup>37</sup>李応禎は服喪中、呉寛や沈周とともに虎丘に出かけるなど親しく交流した。<sup>38</sup>（ちなみに、文徵明の父文林も一四八一年までの、ほぼ同時期に服喪の為に蘇州に帰っており、沈周は、その帰京に際して、「京江送別図」巻を贈っている）。

「東莊図」冊は、その画数の多さや、大幅一紙の左右に、画と対題がかかれていることから少なくとも画家と書家が遠く離れた地にあつて別々に書いた可能性は低く、李応禎の蘇州滞在中に完成したと考えるのが自然であろう。すなわち、呉融の肖像奉納（一四七七年末）以降、李応禎が蘇州を離れる（一四八二年春）までの数年の間に制作されたことになる。さらに呉寛の蘇州滞在中に贈られたとすれば、呉融の肖像の奉納（一四七七年）以後、呉寛の帰京までの一年余りの間になる。先述のように、この作品に、呉宣が東莊の経営を引き継いだことを祝す意味あいがあるとしても、呉寛を抜きに沈周と李応禎が大作を贈ることも考えにくい。呉寛にとって、東莊の経営を弟に任せられることは、帰京に際してこの上ない安心をもたらしたはずである。

以上が、沈周「東莊図」冊の成立背景である。従来から、本作品は沈周の中年期の作とみなされてはいたが、制作背景を追うなかで、制作時期はより限定されたと考える。この作品は、沈周の初期の細やかな筆使いから脱して、後の作品に通ずる力強く骨太なタッチが顕著に表れ、沈



周の画業においても画期的な作品である。景物も、簡潔なフォルムに収斂され、構図や視点も大胆で変化に富み、早期の倣古に基づく作品から飛躍し、「沈周らしさ」が明確に立ち現れている。また、後世の別号図や一般の文人画には見られない、その別業の主人の面貌を具体的に捉えるような描写も試みている。そこからは、沈周がこの作品にこめた思いが強く伝わり、また、それが、この別号図に一般的な別号図とは違う、魅力を与えている。

以上の制作年の絞り込みをふまえ沈周画における本作品の具体的な位置づけや、杜瓊画との関係、さらに古画との関係など、まだ、この作品を巡っては、様々な問題が残っているが、それらについては稿を改めて考察することにした。

## 注

1 中国山水画における漁隱の寓意については、拙著『花鳥山水を読み解く——中国絵画の意味』（角川学芸草書、二〇〇三年）において詳しく論じた。

また本論で扱う、明の別号図、別業図や園林についての基本的な考え方も、同書ですでに示したものである。

2 明代呉派における別号図の重要性を指摘し、作例を挙げて総合的に考察したものに劉九庵「呉門画家之別号図及鑑別举例」（原載『故宮博物院院刊』一九九〇年第三期、『劉九庵書畫鑑定文集』（文物出版社 二〇〇七年載録）がある。ここでは、画卷形式の別号図について論じられ、「南村別墅図」冊や「東莊図」冊は取り上げられていない。

また、クルナスには明代の呉派文人たちの活動を社会経済史的な視点から論じた一連の著作がある。なかでも、本論のテーマに係わりが深いもの

に Craig Clunas, *Fruitful Sites: Garden Culture in Ming Dynasty China*, Durham: Duke University Press, 1996. があり、中島健二・中野美代子の翻訳がある（『明代中国の庭園文化：みりの場所／場所のみり』青土社、二〇〇八年）。そこで「南村別墅図」「東莊図冊」について、これら初期の莊園の生産力が、文人たちの経済的基盤であったと指摘する。

3 文徵明の「拙政園図」冊は、一五一〇年頃退休し蘇州に帰り拙政園を築いた王献臣（弘治六年（一四九三）の進士）の依頼で「拙政園記」とともに制作した作品。拙政園自体の設計にも文徵明が関わったとも言われている。文徵明作品としては画力が弱く、文徵明の画業のなかへ位置づけるには、さらなる検討が必要である。この作品に付された内藤湖南の跋にも、画力が弱いことを指摘する。

4 「南村別墅図」冊跋 杜瓊書陶宗儀八南村別墅十景詠▽「①竹主居 秋窓能種竹、習習転涼陰、始信身如寄、雖移丘壑心。②蕉園 曉来分緑影、秋雨覚涼生、寂坐机堪息、時間佔杵声。③朱青軒 臺殿臨虚壑、平林翠不分、冥机触幽趣、不復在人群。④闔楊樓 危樓如倚柳、羽蓋托春臨、不藉沈酣理、寧伝玄賞心。⑤弘鏡亭 池日翻宜晚、春遊不厭頻、傍湖峰影入、抱席水如茵。⑥羅姑洞 玉晨啓玄扉、靈篇嘯飛仙、鍊景返洞官、保真憶萬年。⑦蓼花庵 夾岸花叢發、似多含暮情、舟行秋水映、微帶夕陽清。⑧鶴臺 密葉蔭方壇、珍寄深谷華、源遠莫窮時、有林幽人宿。⑨漁隱 蟹蛤烟中市、漁蓑早結縁、鯨魚如可逐、遮莫上青天。⑩螺室 雪恋樹高処、遙看玉萬重、小齋聊自憩、窓外映前峰。」（『積文筆者』（便宜の為、景に数字を付した。⑩の「螺室」は画中の篆書題は廬室とする）

杜瓊自跋「予少遊南邨先生之門、清風雅致、領略最深、与其子紀南甚相友善、不意先生棄世、忽焉數載、偶從筇中得南村別墅十景詠、吟誦之餘不勝慨慕、聊因小景以識不忘、因成即置之故甌中、一日紀南偶訪檢出相示、欣然謂先君可從此不朽、伝之後世、猶令人知胸中丘壑、強欲持去、遂命録

先生詩于後、并題數語而歸之。正統癸亥（一四四三）春三月既望京兆杜瓊識」

5 「友松図巻」は、明代中期に盛行する定型的な「別号図」巻の、現存する最も早期の作例とされる。劉九庵前掲（注2）参照

6 沈周・杜瓊・劉珏が一図一図描いた「報德英華図巻」（北京故宮）の杜瓊の跋（成化己丑（一四六九年）杜瓊七十四歳）に拠れば、沈周の叔父貞吉が杜瓊の図を見て、「杜瓊の画は固より妙であるが、なお「皴皴与夫巒峰之巧」（適切な皴法による山石表現の巧みさ）を欠いているため、私が君のために不足のところを補う」として補筆したことを述べている。そこからは、彼らが極めて親しい関係であったこととともに、杜瓊の晩年の画風が必ずしも成熟したものと見なされていなかったことが窺える。

7 「南村別墅図」冊の董其昌跋「沈恒吉（沈周の父）学画于杜東原（杜瓊、号東原）、石田先生（沈周、号石田）之画伝于恒吉、東原已接陶南村（陶宗儀、号南村）、此呉門画派之岷源也」（年紀なし）。岷は四川の岷江、長江の源流の一つ。

8 正徳『松江府志』巻16（『天一閣明代方志選刊 続』6所収本）「南村草堂在泗涇北、陶宗儀耕読所。」以下の約18文字はこの版では半ば以上判読不能だがその地についての具体的記述ではない。

9 北宋の沈括『夢溪筆談』巻17所載の「瀟湘八景」は、「江天暮雪」が最後ではない。また、西湖十景の現存最初の記事である、南宋の祝穆『方輿勝覧』（巻1）でも、雪景の「断桥残雪」は末尾に配されていない。雪景を一つ入れることは約束ごとであったと思われるが、宋代で普及したこれら八景、十景などの名数画に関する当初の文献資料では、季節順や雪景を最後にすることは、意識されていなかった。徐賁「獅子林図」冊も雪景は最終幅ではない。一方、陶宗儀の南村十景詩は、他の景は必ずしも季節順ではないが、最後を雪景としている。最後に雪景を置く早期の例として想

起されるのは、元の呉鎮の「墨竹図譜」（台北故宮）が、雪竹を最後に配していることで、呉鎮は、意識的にそれを選んだと考えられる。

10 姚一元（一五〇九―七八）、字維貞、号画溪居士、湖州（浙江省呉興）長興の人。嘉靖二十三年（一五五四）の進士。官は順天府尹に至る。一五七一年に致仕し帰田した。剛直な性格で知られる。（伝は『萬姓統譜』巻29などに拠る）。

11 董其昌跋（1）「白石翁、為呉文定公写東莊図二十余幅、李少卿篆称为双絶。余従王百谷聞之、向蔵長興姚氏、数令人與和会不獲見。今帰修羽収蔵、遂得披閱以快生平積想。觀出入宋元、如意自在、位置既奇絶、筆法復縦宕。雖李龍眠山莊図・鴻乙草堂図、不多譲也。修羽博雅好古、已収鴻乙草堂十図、今又得此以副之。嘉時勝日神游其間、何羨坐鎮百城哉。賞玩不足、聊題數語、以弁其首。董其昌書。丁巳三月十有九日識。」（沈周が、呉寛のために描いた東莊図20余幅。李応楨の篆書とともに双絶と称される。私は王百谷からこれを聞いて、さきの所蔵者である長興の姚氏に人づてに閲覽をたびたび依頼したが果せなかった。今、張修羽の収蔵に歸し、遂に見ることがかない、積年の想いが果たされた。觀れば宋元の画風を自在に用い、構図は他に例をみないすぐれたもので、筆法も自在でおおらかである。たとえ、李公麟の「山莊図」や盧鴻の「草堂図」と比べても引けを取るものではない。修羽は博く雅に通じ、古えを好み、すでに盧鴻の「草堂十図」を収蔵している。今これを得てそれに加えた。折々に、その間に遊べば、百城を治めることも何ら羨やむことがあろうか。いくら賞玩しても見飽きない。數語を題して、最初の賞玩の弁とする。董其昌 丁巳「一六一七」三月十九日）（2）「白石翁為呉文定公写東莊図、原有二十四幅。文休承所蔵。因官長興失之後、為修羽千方踪迹、得二十一幅、餘已化去、即沈翁長跋亦不可見矣。辛酉八月京口重觀記此、以俟訪之。董其昌。」（沈周が呉寛の為に描いた東莊図は、もと二十四幅あり、文嘉の所蔵であつた。

長興「の姚氏」がこれを失ったので後、張修羽の為に千方手を尽くして探し求め、二十一幅を得たが、その余はすでに消えてしまい、沈周の長文の跋も見ることが出来ない。辛酉「一六二二年」八月、京口「鎮江」にて再び観てこれを記し、その訪れんことを俟つ。董其昌『虚齋名画録』巻11（『中国书画全書』12 上海书画出版社）所載。また『中国古代书画図目』7、蘇二四—〇二八—（23）（24）の図版を参照した。

12 呉寛による父の墓誌「先考封儒林翰林院修撰府君墓誌」『匏翁家藏集』巻61（文淵閣四庫全書電子版に拠り、四部叢刊本を適宜参照した。以下『家藏集』と表記。）また呉寛の父や家系については坂元晶「明代中期蘇州商人のネットワークの一考察…呉寛の家系の復元を中心に」（『待兼山論叢、史学篇』30、55—82頁、一九九六年）を参照した。

13 李東陽「東莊記」（正徳『姑蘇志』巻32『天一閣藏明代方志選刊 続』13所収）、並びに『懷麓堂集』巻30所収）に、蘇州西部への移居について触れる。また前掲注12「墓誌」（『家藏集』巻61）に、旧宅東莊の整備は呉融晩年のことと記す。（『懷麓堂集』を含め、以下の沈周を除く明人の文集も、特に断りのない限り文淵閣四庫全書電子版に拠る。）

14 園池という項目は、正徳『松江府志』など、他の地方志には見られず、草堂、園亭など建物を表す項目のみで「園池」つまり庭そのものを指す項目は立てられていない。蘇州での園林の盛行の表れといえよう。

15 「東莊、呉文定公父孟融所治也。中有十景。孟融孫奕又増建看雲臨渚二亭。」（前掲載注13『姑蘇志』巻32）

16 李東陽の文集『懷麓堂集』巻30所載の「東莊記」には年記がない。

17 李東陽は湖南茶山の人。呉寛より早く若くして官界に入った。呉寛の状元及第以前に呉寛の詩名は聞いていたが、壬辰（一四七二）年の春に服喪の為に帰省した際には、まだ面識がなかった。「呉文定原博未第時、已有能詩名。壬辰春、予省墓湖南時、未之識也。…」（錢振民『李東陽年譜』

復旦大学 一九九五年47頁、及び『懷麓堂詩話』。李東陽は服喪の帰路呉県を經ている。その帰省の際に各地で詠んだ詩は「南行稿」にすべて収められ「全集」に収録されているが、蘇州で東莊を訪れたことを示す詩はない。（『李東陽年譜』48頁、及び『懷麓堂集』巻91）

18 劉節、字大夏。李東陽が服喪で帰省した際、送った友人として「京中友人劉大夏。…」と筆頭に挙げ、文集中にも親しい交流が多く記される。李士実は『国朝献徵録』巻48に伝がある（前掲『李東陽年譜』48頁ほか）。

19 陳正宏『沈周年譜』（復旦大学出版社 一九九三年）134頁。沈周のこの時期の動向については、同書に基づき、王衛平主編『沈周集』上・下（上海古籍出版社 二〇一三年）などを参照し確認した。

20 呉寛のこの時期の動向については、呉寛『家藏集』所収の詩文に基づく。父融の死については前掲注12「墓志」、兄については同巻63「亡兄処士墓誌」に拠る。

21 前掲注19『沈周年譜』134頁。

22 同前『沈周年譜』135頁。また呉寛『家藏集』巻70「隆池阡表」。

23 田洪・田琳編『沈周絵画作品編年図録』（天津人民美術出版社 二〇一二年）上75頁。『寓意録』巻3、『大観録』巻20著録の「雨夜止宿図」の跋に拠る。その時、呉寛の弟呉宣も同席していたことが分かる。

24 前掲注19『沈周年譜』140頁。『故宮歴代法書選集』第10冊「林逋手札二帖」の呉寛跋に拠る。また『家藏集』巻5に「過沈啓南有竹別業」（是日閱李成画又觀商乙父尊下有銘）、「与啓南游虞山三首」詩が載るが年紀がない。

25 同前『沈周年譜』149頁。『式古堂書画彙考』画 巻25に著録の「沈周、送呉文定公行図并題卷」他。また呉寛『家藏集』巻57「己亥上京録」などに拠る。

26 成化十五年仲春に蘇州を訪れた程敏政とともに沈周、李応禎、呉寛が虎



- 丘に遊んだ際の詩に拠る（『沈周年譜』147頁）。また、呉寛帰京後の同年五月にも李応禎が顔昌とともに沈周宅を訪れている（『沈周年譜』152頁）。
- 27 呉寛の仕官後の帰郷期間については、坂元前掲（注12）56頁参照。
- 28 文徵明「過呉文定公東莊」詩に「相君不見歲頻更、落日平泉自愴情、徑草都迷新輟迹、園翁能識老門生、空余列樹依流水、独上寒原眺古城、匝地綠陰三十畝、游人婦去乱禽鳴」（『甫田集』卷5）とある。また、「遊呉氏東莊題贈嗣業」（呉氏の東莊を訪れ、その後継者に詩を題して贈った）に「渺然城郭見江郷、十里清蔭護草堂、知樂漫追池上跡、振衣還上竹辺岡（中有知樂亭振衣岡）。東郊春色初啼鳥、前輩風流幾夕陽、有約明朝汎新水、菱濠堪著野人航」（『文氏五家集』卷6）
- その後、王世貞（一五二六—一五九〇）が、友人徐廷禎の園林を訪れた際の「游呉城徐少參園記」には「…友人徐少參廷禎、治十年矣。或曰故呉文定公東莊、後人蕪而它屬焉…」という。（『弇州四部稿統稿』卷64所載）
- 29 張丑『清河書畫舫』卷12上に著録。また王世貞『弇州四部稿』卷138に言及。
- 30 十三景は画冊の幅数として不自然であり、数幅が失われたものと考えられる。
- 31 前掲注29『清河書畫舫』『弇州四部稿』に「十三幅、各幅作一体」
- 32 呉寛による呉融の肖像の奉納の祝文「東莊奉安先考画像祝文」に「維成化十三年歲次丁酉（一四七七）十二月某日、孤子寛、謹以牲醴之儀、敢昭告於顯考修撰府君、東城之下先世所基、嗟嗟府君実生於斯、迨長西徙門戸、独持每念旧業、東望興悲、乃修乃復…」とある（『家藏集』卷56）。
- 33 『姑蘇志』卷32所引（『家藏集』卷28にも所載）の呉寛詩に「爾（呉奕）の父西庵、扁は拙修、…」という。また、『家藏集』卷53所載の「故中書舍人の王允達が呉寛の亡弟宣、字原暉の為に書した『拙修庵記』の後跋」（右拙修菴記一篇、故中書舍人王君允達為亡弟原暉作者）中でも、「庵は東

莊続古堂の後ろ西にあつて、扁額の『拙修』というのは、東坡先生が陶淵明詩に和した詩から取った」と記す。

- 34 その後の東莊については、注28参照。

- 35 文林「南京太僕寺少卿李公墓誌銘」（『文温州集』卷12）前掲（注19）『沈周年譜』174頁所引。

- 36 前掲注19『沈周年譜』174頁。送別詩「送李貞伯服闋還朝」は、同『沈周集』上、138頁にも所載。

#### △作品データ・挿図引用先▽

- 沈周「東莊図」冊 全二十一幅 李応禎篆書対題 紙本墨画着色（画）23.8×33 cm 南京博物院

- 挿図出典（図1、7、8、9、10）China 5,000 Years: Innovation and Transformation in the Art, New York: Guggenheim Museum Press, 1997.

- 杜瓊「南村別墅図」冊 全十幅 紙本墨画着色 33.8×51 cm 上海博物館

- 挿図出典（図2）『中国古代書画図目 2』文物出版社 一九八七年  
文徵明「拙政園図」冊 全八幅 一五五一年 紙本墨画 26.4×27.3 cm

メトロポリタン美術館

- 挿図出典（図3）The Collection Online, Metropolitan Museum of Art, <http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/39654?rpp=30&pg=1&ft=Ming+dynasty+painting&who=Wen+Zhengming%24Wen+Zhengming&pos=1>

- 杜瓊「友松図」巻 紙本墨画着色 29.1×92.3 cm 故宮博物院・北京  
挿図出典（図4）『故宮博物院藏文物珍品全集7 呉門絵画』文物出版社 二〇一〇年

王蒙「恵麓小隠図」巻 紙本墨画 28.2×73.7 cm インディアナポリス美術館

挿図出典 (図5) ジェームス・ケーヒル著・新藤武弘訳『江山四季

―中国元代の絵画― 明治書院 一九八〇年

徐賁「獅子林図」冊 全十二幅 紙本墨画 22.5×27.1 cm 国立故宫博物院・台

北

挿図出典 (図6)『故宮書画図録22』国立故宫博物院刊 二〇〇三年









